

橈骨遠位端骨折—進歩と治療法の選択

斎藤英彦，森谷浩治 ● 編集

〔評者〕金谷文則（琉球大教授・整形外科）

このたび，手の外科の第一人者である斎藤英彦先生と森谷浩治先生により「橈骨遠位端骨折—進歩と治療法の選択」が出版された。本著は Fernandez D, Jupiter J の “Fracture of the Distal Radius” に匹敵する名著である。

斎藤先生は冒頭の「編集に当たり」で田島達也先生に「Colles(カルス)骨折について調べてみませんか」と言われたエピソードを紹介している。Colles 骨折は転倒により生じる最も多い骨折であり，以前は橈骨遠位端骨折の総称のように使われたこともある。近年では Colles 骨折といえば橈骨遠位端関節外伸展型骨折を指し，屈曲型骨折や関節内骨折を含めて橈骨遠位端骨折 Fracture of the distal end of the radius と呼ばれることが一般的である。最近では橈骨遠位骨折 Fracture of the distal radius/Distal radius fracture と呼ばれることも多い。

本書では橈骨遠位骨折の歴史的な背景から分類，治療法の変遷やリハビリテーションまで網羅されている。橈骨遠位骨折は最も頻度の高い骨折であり，その機能障害も大きい。症例により保存的治療でも比較的良好な成績が得られる。さらに，若年者に多い高エネルギー損傷と高齢者の低エネルギー損傷では同じ関節内粉碎骨折でも病態も治療法も異なる。本書はこれから橈骨遠位骨折を治療する若手医師にとって，その病態と手術適応を理解するうえで指針となり，中堅からベテラン医師にとっては知識を再確認して整理するうえで重要と考える。

現在は橈骨遠位骨折治療の転換

期であり，この時期に本書が出版される意義は大きい。転換期になった大きな原因は二つあり，骨粗鬆性橈骨遠位骨折の増加とロッキングメカニズム(ロッキングプレート，ロッキングネイル)の出現・普及である。日本はかつて例を見ない超高齢社会を迎えており，骨粗鬆症の増加に伴い骨折が急増している。骨粗鬆症性骨折のうち，大腿骨頸部・転子部骨折と椎体骨折は生命予後を悪くするが，最も発生数の多い橈骨遠位骨折は生命予後に影響を及ぼさない (Cauley JA: Risk of mortality following clinical fractures. Osteoporosis Int 11: 556-561, 2000.)。一方，核家族化により一人暮らしの高齢者(独居老人)が増加していることから，高齢者の橈骨遠位骨折では早期機能回復が ADL, QOL の観点から重要になっている。

高齢者の橈骨遠位骨折は合併する骨粗鬆症により，受傷時に転位の少ない例でも転位が進行し，さらに徒手整復により良好な整復が得られた例でも再転位を生ずる傾向がある。骨粗鬆症が高度な例は従来の手術法では強固な固定を得ることは困難であった。近年開発されたロッキングプレートによる角度安定性(angular stability)と軟骨下骨の支持(subchondral support)による強固な固定が可能になり，早期から良好な機能回復が得られるようになったことから手術例が飛躍的に増加している。本書ではロッキングプレートの手技が詳述されているばかりでなく，高度骨粗鬆症合併に対する骨セメント療法や，特に若年者で問題に



なる靱帯損傷の治療についても述べられている。一方，高齢者では軽度の変形が残存しても機能障害は比較的少なく，保存療法により良好な成績が得られる例も多い。本書ではギプス療法についても詳述され包括的な内容になっている。

本書は，各分野の第一人者が「橈骨遠位骨折」について記載しておりその内容はもちろん充実しているが，分担執筆にありがちなまとまりのない本ではなく，一本筋の通った本になっているのは多くの章を自ら執筆された編者の斎藤先生のご尽力によるものであろう。本書は現時点での到達点を示した本であるが，今後販売が予定されているロッキングプレートも控えており，編者の斎藤先生が述べているように，版を重ねるとともに最新の知識を加えて進化してゆく本になることを期待している。

B5判 296頁

定価9,975円(本体9,500円+税5%)

金原出版 刊